

# 經濟論叢

第六十一卷 第一號

---

わが國民生活と封建制度……………堀江保藏

農業立國論批判……………山岡亮一

アンウィン『十六・七世紀の工業組織』……………堀江英一

共同研究

—— 絶體主義をめぐつて ——

---

京都帝國大學經濟學會

## 共同研究

—絶對主義をめぐつて—

### 一 「共同研究」の意味について

經濟論叢が新しく再刊される。新しく出る以上は形式ばかりでなく、何か内容にも新しいものを盛りなければならぬといふ様な責任感が何時も編輯者の私の心を去らなかつた。そこで思いついたのが「共同研究」である。併し「共同研究」とは一體何んだとひらきなほられると今の私には的確に答えるべき言葉を持たない。大體この共同研究といふものは編輯者がつくり出したリ、考え出したリしたものではないからである。それは云はゞ再建過程にある經濟學部の研究者達の間に自然にかもし出された學問的な雰囲気だといつてよい。

今まで經濟學部の研究者の研究對象は何時もせまく限られていた。彼等はそのう意味で小さな専門家であり、職人であつた。彼等には従つて又共同の研究テーマについて語りあい、考へ合ふといふような機會もなかつたし、能力もなかつたのである。

ところが敗戦後の學界蕭條の風で經濟學部の舊體制も崩れ、職人達は研究上の束縛から解放されて自由な世界に出て來た。

現在は恰もそういう状態である。併し個々の研究者は能力や技術から見るとやはり手工業的である。だから「共同研究」といつても大規模な研究調査の組織によつて廣範圍に仕事をまとめていくようなことはとても出来ない。たゞいままであまりせましくなく、除うつだつた仕事部屋から出て、自由な學界の空氣を吸ひ、そこで何か共通の問題を拾ひ、それについて語りあいたいというのが皆んなの共通な氣持であつた。經濟學部の一角にかういう氣運がつくり出されたということだけでも、從來の經濟學部の傳統からみれば、大きな進歩であると思ふ。

今までの經濟學會の研究會は何等の意味でも「共同的」でなかつたとは言えない。併しそれは云はゞ職人達が小さな功名心にとらはれてやるマスター・ピースの發表であり、親方の前で行ふ御前試合だつた。ところが今は本當に純粹な自主的な研究心から研究會に参加して、其處で皆んなの能力を伸ばそうといふのである。いや自由な自主的な研究心は必然的に共同研究の形式を欲するのだ。これは從來の經濟學部に見られなかつた點である。そしてこれは是非とも今後皆んなで育て行かねばならないものである。

それから從來の研究會では、研究者のセクト的な氣持や研究方法から共同のテーマをえらぶということが出来なかつた。それで研究會は、御説を拜聴する會や、そうでなければ揚足をとる會になつた。これからの共同研究は云ふまでもなく共同のテ-

マを取上げねばならない。併し問題の共通性を何處におくべきか。これは研究會の基本的な性格をも決定する重大な點である。一體この研究會のメンバーには經濟理論や經濟思想の研究をやつてゐる人もいるが、農業や統計や財政等の問題を専門に勉強してゐる人もいる。皆んなの専門が分れてゐる時に、何處に問題の共通性を求めたらよいだらうか。専門の領域を觀念的に「擴充」したり「展開」してみても恐らく本當の意味の共通な問題は出て來ないだらう。これは結局各自の今まで持つていた専門の問題を一そう現實の方向へ押進してみる以外にないと思ふ。各研究者の立つてゐる社會的現實の共通性の自覺、これが又各自の限られた研究領域の更に奥底にある問題の共通性の自覺に  
なる。

「絶対主義」を共同のテーマとして取上げた我々が最初から以上のような自覺を持つていたとは云はれない。併し最初からはつきりした自覺を持つていたかどうかといふことはこの際大して重要なことではない。重要なことは「絶対主義」の問題を取上げるに際して、從來のセクト的な職人的意識からすれば必ずさうであつたように、これを「専門外」の問題としておつくうに思つたり重荷に感じたりしたものは誰もいなかつたことである。いや研究會を進めてゆくにつれて、從來の研究會に見られなかつた活潑な討論が交はされ、これを通じてお互いが色々な深い示唆を與へられたのであつた。この事實こそ「問題の共

共同研究—絶対主義をめぐつて—

通性」を、問題と現實との生々したつながりも示すものである。「絶対主義」は日本の歴史的社會的現實を貫いてゐる太い脊骨の様なものである。絶対主義は或時は封建制と結びついて、或時は官僚的支配機構と一體となつて、日本の社會のあらゆる部分に浸透してゐる。吾々が社會人として生活してゐる場合にもこの太い畸形的な脊骨に到る處でぶつかるであらうし、吾々が研究者として研究を進める場合にも、絶対主義の問題を回避することは出來ない。吾々の研究對象が如何に限定されてもそれと現實との深いつながりを見失はないならば、絶対主義は色々な形で吾々の研究領域に入つて來るだらう。そういう意味で吾々がまづ「絶対主義」を共同研究のテーマとして取上げたのは成功だつたといつてよい。併し「絶対主義」が共同研究のテーマとして特にすぐれてをり、其他の問題はそうではないといふようなことを云ふのではない。問題自體の中に共同のテーマとしての適否があるのではなく、むしろ重點は問題ととりあける吾々の態度にある。吾々が共同研究を通じてかたく結びついていれば、あらゆる問題が共同のテーマとして取上げられるだらうからである。

さて私はこれまで經濟學會の研究委員の領分にあがり立入り過ぎたやうである。共同研究の意義やプランは研究委員が立てられるだらう。今後の經濟學會では、研究委員と出版委員とが互ひに連絡して、經濟學部の研究と出版の事業とを結びつけ

て行こうというような申合せがあつたので、共同研究をまとめるついでにこれに關して私の愚論をならべたまでである。併し出版委員の立場から共同研究をまとめるということはどういふことか。個別研究は論文になるが、共同研究は論文にならないのではないか。共同研究は個別研究を媒介するものではないか。更に共同研究の意義は共通のテーマをめぐつて各メンバーが語り合ひ、考へ合ふ過程そのものにあるのではないか。共同研究を何かの「讀み物」にしようとするならば、それは研究会の記事になり、座談會の速記録式のものになるのではないか。更に私は前に共同研究は再建經濟學部に生れた零團氣だといつたが零團氣というようなのは文字にならないのではないか。こういうような色々な問題が出版委員の立場から考へられる。

勿論共同研究会の経過をそのまま再生するというよめなことは問題にならない。第一この研究会には速記者がいないのである。而もこれはあくまで共同研究であつて、共同研究会の記事でないとなれば、誰かど一個の論文を書くつもりで共同研究の成果をまとめねばならない。この役をまづ出版委員の私が引受けたのである。併しこれは必ずしも出版委員に限られた仕事ではなく、むしろ共同研究会のメンバーの共同の責任でなければならぬ。各自が共同研究の成果を整理し反省し、自分の意見もつけ加へてまとめる。そういう意味で、これは各自の個別研究の體裁をもそなへるが、また他方でそれはあくまで共同研究

の成果を資料とし、各自が代る／＼この仕事を引受けて研究会の共有財産としてゆくという意味で、本質的に共同研究である。「絶對主義」を共同のテーマとする研究会は昨年十二月の初旬と今年三月の初旬二回開かれた。最初の研究会では私が「日本評論」十月號の羽仁五郎氏の論文「官僚主義批判」を報告し、討論の材料とした。次の研究会では、堀江英一君が「歴史學研究」第一三號の林健太郎氏の論文「絶對主義について」、山岡亮一君が經濟思潮第一輯、大内力氏の論文「過小農制度と日本資本主義」を報告し、これに基き各自が意見を交はした。私はこの二回の研究会に於ける各自の意見と、別に報告者に書いてもらった意見とを材料として、私の責任に於てまとめてみた。但し大内氏の論文についての共同研究は紙面の都合上次回にまわすことにした。

なほ研究会の参加者は田杉、山岡、出口、堀江英一、青盛、山崎、鳥津の諸君、そして出版委員の鳥である。

## 二 羽仁五郎氏、官僚主義批判

日本の官僚、或は官僚主義は軍國主義者の追放、財閥の解體等をよそに、あらゆる手段をつくして、その機構の存続をはかつている。政界にも、經濟界にも、教育界にも、わが國の民主化の潮流に超然としてなほ根強い存在を示している官僚主義の本質は一體何か。何處にその根源があるのか。その日本に於ける

官僚主義の存続のしづときは、阿部眞之助氏の様に「日本人の性質」の中に、「國民性」の中に、その根源を求めよう。見解をさへ成立させる程である。日本ではいくら民間の智能を官界に注入してみても、彼等は何時の間にか官僚以上の官僚に化けてしまふ。これは単に上級官僚の問題ではなく、驛や扇の窓口の不親切さも、配給所の役員の横柄さも非難的となつてゐる。而も例へば配給所の人が其處へ入る前は魚屋の兄いや八百屋のおかみさんであつたことを考へると、日本人は質的に官僚的であり、官僚の征伐より、「私達の心中の官僚の征伐が先決問題ではあるまいか」というような結論になつて来る。テーマが官僚制度でなくて「官僚主義」となると多少問題がぼやけて来て、官僚制度の特に悪い面が抜き出されて批判されることゝなつたり——この點羽仁氏の官僚主義批判の批判も成立つと思ふ——又主義と云へば人間の心情や心的傾向にも關係するところあり、阿部氏の様な議論の出て来る可能性もある。併しすべてが「日本人の性質」で片附けられると、官僚主義ばかりでなく、軍國主義も封建主義も皆さうだと云ふことになり、およそ社會科學的批判と云ふものが成立たまず、社會に於ける眞の敵と味方を區別する政治的感覚もゼロになり、「總さんげ」式の宗教論となつて、問題は完全にこんぐらかるであらう。

この點に對する羽仁氏の批判は非常にはつきりしてゐるし、氏の所謂「人民の立場」も、又官僚主義に對する氏の見解を明

共同研究—絕對主義をめぐつて—

確に現はしてゐるから、暫らく氏の言葉を引用してみよう。しかし眞實の論理は、こうだ、あらゆる政治機構は、元來、人民から發する。これは云うまでもない。君主も、首相も、知事も裁判官も、警察署長も、軍人も、いわゆる小役人たちも、もとは人間であり、國民の中から出たかもしれない。ばかりでなく、その君主の生活、首相また知事また裁判官また警察署長また軍人また小役人たちの月給も、われわれ人民の租税から出るのである。われ／＼人民が租税を出してかれらをやしないやとつてゐるのである。人民によつてやしなはれてゐる權力機構が人民に對立し、人民を壓迫し、人民をくるしめる權力機構となるところに、官僚主義の本質があり、本質的な意味における道義の逆轉があるのである。われ／＼人民が租税を出してやとつてゐる警察署長がわれ／＼人民にむかつていはりちらし、人民が租税をもつてやしなつてゐる君主を人民がたががつておらねばならない。というところに、階級的支配の本質があり、したがつてそこに封建的な支配もあつたのである。「日本人の性質」でも「私達の心中」にでもなく、階級社會の本質、なにかんづく封建的支配の性質の問題があるのである。」

羽仁氏は「官僚主義の傳統は、本質的には封建性から来て」といふと云はれる。併し同時に「近代の官僚主義は、歴史的論理的には、主として絕對王政の問題なのである」と言はれる。われ／＼が特に日本で官僚主義を云ふ時、羽仁氏の前の主張が正

第六十一卷

五三

第一號

五三

しいように思はれる。併し官僚主義や官僚制の一般的規定としては後の見解が正しいと思はれる。その何れが本當か。實は羽仁氏の見解では、絶対王政の本質を封建的支配に求めることによつて兩者は統一されているのである。これは新しい見解である。そこで問題は官僚主義より絶対主義へと移つてゆく。

絶対王政の歴史的地位は歴史學、經濟史學で色々問題にされているが、普通には封建社會から近代社會への過渡的段階として考へられている。過渡的段階という以上は歴史的進歩に於ける一つの段階として理解されているわけであらう。併し羽仁氏はかような普通の見解をしりぞけて、絶対主義の進歩性を全く否定し、それは一つの進歩的段階であるよりは、一つの反動的時期であつたとされるのである。絶対王政に關するこの新しい見解は、イタリヤ・ルネッサンスに關する研究から得られたと羽仁氏は云はれる。ルネッサンスは農奴解放および自由都市共和制確立のための市民闘争より出發し、更にイタリヤ自由都市共和國聯邦という新しい國家形態にまで發展せんとして、そこで挫折する。この「挫折」は自由都市に於ける近代勢働の未成熟、上層市民の裏切り、それに付くむイタリヤ絶対王政の反動的攻勢によつたものであることは「ミケランヂェロ」にも指摘されている。羽仁氏はまた新にこの論文では、ドイツ自由都市の盛衰についても同様の見解を述べている。ドイツ絶対王政は三十年戦争の間に封建的支配に對して闘争する自由都市の民

兵制——それは農民、市民自らの武裝である——を常備軍制に轉化させ、職人を買収して都市の近代的軍事技術を學びとり、上層市民と勤勞市民大衆との對立を利用し挑發して、自由都市をひとつ／＼攻撃し腐敗させ潰滅させてしまつた。自由都市共和制の潰滅により農奴解放運動も中絶し、自由な市民の都市の代りに御用商人の都市が生れる。この御用商人都市と農村に於ける封建的支配の存続の上にドイツの軍國主義と官僚主義とが成立したのである。

要するにこのような羽仁氏の絶対主義や官僚主義に關する見解の中には「人民の立場」が太くはつきりと貫かれてゐる。初めに封建的支配から人民の解放或は人民の自由な結合の形態として自由都市國家が現れる。この國家はそれ自體の中に近代國家への發展の萌芽を宿している。自由都市國家より近代國家へのこの發展は、羽仁氏の立場からすれば、より一層完全な人民解放への途でなければならぬ。ところがこの發展の可能性は絶対王政の出現によつて「挫折」せしめられる。人民解放への明るい志向があれば、これをさまたげるもの影はいよ／＼暗く描かれる。そしてかゝる立場から進歩的なものと反動的なものとはきりきり分けられるのである。封建的支配と自由都市、自由都市と絶対王政、封建武軍制と民兵制——この中にはルネッサンス自由都市の民兵制もフランス革命軍もアメリカ獨立戦争の市民軍もソビエト革命に於ける赤衛軍もす

べて含められる——、民兵制と絶対王政の常備軍制、それから貴族主義の官廷教育と學生の組合であるポロニヤ大學や教師の組合であるパリ大學、これらの市民大學と獨乙や日本の官僚主義的國家主義的大學。これらの進歩と反動、反動と進歩が歴史的過程の中に交々現れ、そしてこれらの段階を貫くものが人民解放のための人民の道徳的力である。

かういふ羽仁氏の非常にはつきりした歴史の敘述に、私達は何時も深い感銘と示唆を受ける。歴史がずばりと鋭く切開き、何かいまでもかくされていた歴史の新しい断面が吾々の前にあらはれたようにも思はれるのである。併し羽仁氏の敘述からうけた最初の感銘が消え去ると、一種の不満が残るのは何故だろうか。羽仁氏は絶対主義に關する通説に、單なるアンチ・テーゼを投げつけてをられるからではなからうか。一定の立場から絶対主義に對して強い照明が與へられたとしても、その歴史の断面は歴史全體の姿を現はしてはいないのでなからうか。かういふいくつかの疑問が基となつて、われわれの共同研究會では羽仁氏の論文に對して色んな意見が述べられた。

まづ絶対王政を一般の歴史の反動的段階として規定することが正しいかどうかについて當然皆んなの議論が集中した。絶対王政を反動的とする羽仁氏の見解の基礎には、その反動的對象たる自由都市をあまりに近代化し過ぎてゐる傾きがありはしないか。これは主として堀江英一君が提出した疑問であつた。

共同研究——絶対主義をめぐつて——

自由都市が直線的に近代國家へと發展する可能性を含んでゐるのであれば、自由都市の運動を潰滅させた絶対王政の出現は確かに反動的である。併しルネッサンス時代の自由都市が果してそれだけの可能性を含んでいたのであらうか。自由都市の運動は挫折したという。併し何故に挫折したかが考へてみなければならぬ問題である。これには絶対王政の反動性のみではなく自由都市そのものの性格、その經濟階級構造の究明が必要である。既に羽仁氏自らもイタリヤ自由都市共和國に於ける「近代工業労働の未成熟」を指摘してをられる。そうだとすると、自由都市自體の中にすでに「挫折」の原因が内在してゐるのではなからうか。近代工業労働の未成熟は近代工業生産の未成熟でもあり、廣範圍の交通およびそれによつて生ずる統一的市場の缺如でもある。それは又農奴解放の制約ともなり、市民の自由そのものをせまく限界づける。手工業者や商人や金融業者の都市が如何に結合してみても——いや實はその結合すらこの經濟の段階では困難であるが——近代國家を成立させる統一的な基礎とはならないであらう。

自由都市、そして其處に於ける市民的自由と農奴解放のためのため、かひ、その進歩的意義は高く評價されねばならないが、當然それには一定の限界があつたとすれば、自由都市を潰滅させた絶対王政を必しも一つの反動的段階と規定することは出来まい。いや自由都市が、或はその聯合が絶対王政に破れたと云

ふことは、或場合に於ては後者が前者よりも一そう高い歴史の段階と生産力の水準にあつたことを證明するものではなからうか。

近代國家、即ち民族國家が成立するには都市工業と農村との結合よりなる自由都市の基盤よりも一そう廣大な統一的な經濟的地盤が形成される必要がある。即ち近代的工場工業が設立され、統一的市場が形成され、國內の封建的障壁がとりくづされ、廣大な交通通信網がはりめぐらされ、更に外國市場が獲得され航海貿易業が獎勵されねばならない。抑よそかゝる物質的條件の形成のために、絶對王政の強力政策、殊にいわゆる重商主義政策が大いに貢獻したことは一般に認められていることである。私達は勿論、羽仁氏と正反對に絶對王政の「進歩性」をこゝで強辯しようとしてゐるのではない。シュモラーの重商主義理論などもよほど制限つきで理解しなければならぬと考へてゐる。絶對王政の強力政策は、必しも「進歩的」立場より出たものではなく、まづ何よりも自己の權力地盤を維持し形成するためのものであつたであらう。従つてこの政策は或場合には封建的勢力との妥協をも含み、農奴生産様式の保持、人民解放の抑壓ともなるだらう。併し權力地盤の維持は必然的に近代的産業經濟の形成に結びつくこと云ふ歴史の論理に於て、絶對王政の利己的目的は近代ブルジョアジーの利害と一致したのであつた。この近代ブルジョアは自己の活動のために廣大な經濟領域

を必要とする。その意味で彼等はルネッサンスの都市の市民と違つて、正に「民族的資本家」であり「國民的商人層」である。彼等の「自由」はまず「資本」の自由であつたかも知れないが、近代的資本制産業の成長のためには勞働力の封建制よりの解放が必要であり、従つてこの段階に於てこそ封建的農奴制の徹底的打破、より一そう完全な「人民の解放」が實現するわけであらう。それと同時に封建制と妥協しつゝある絶對王政そのものも打倒され、近代ブルジョアの活動領域の上に立つ近代的民族國家が形成されるのである。

かうみてくれば、絶對王政のいわゆる媒介的役割を認めないわけにはいかない。そして絶對王政の反動とは果して何に對する反動であるか考へてみなければならぬ。羽仁氏は絶對王政の反動性をルネッサンスの自由都市の側から指摘されたが、吾々はむしろ近代産業社會の側からその反動性を指摘する。それと同時に歴史の過程を「進歩」と「反動」、「人民のたゞかひ」とその抑壓の諸段階でうつめる前に、その一つ一つの段階の經濟的、社會的意味を充分明かにし、それらの進歩性と同時にきを限界をも究明する必要があると思はれる。

次に共同研究會で問題になつたのは、羽仁氏の論文では絶對王政の國民的性格が見落されてはいないかという點である。この論文ではイタリヤ、ドイツ、日本の絶對王政が主として取扱はれてゐるが、フランスやイギリス、特にイギリスの絶對王政



は全く問題になつていない。ところがイギリスの絶対王政の性格こそ、羽仁氏の絶対王政論乃至官僚主義批判の論據に對して重大な反證材料を提供するのである。

なるほどドイツや日本などの様に、近代産業が未成熟で、絶対王政の權力地盤形成のために、上から官僚機構を通じて劃一的に諸制度を注入しなければならぬ場合には、悪しき意味の官僚主義が發生する。移入せられるものがたとえ近代的制度であるとしても、近代産業の地盤を缺くところでは、官治行政の中に封建的支配の要素が多分にまぎれこまざるを得ない。但しこの場合でも官僚的支配が直にまた封建的支配を意味し、そういう意味で全く反動的なものであるとは限らないし、逆にまた官僚の彈壓をうけて潰滅した様々の人民の運動がことごとく進歩的であつたとは限らない。むしろ人民の運動の方が却つて封建的な自治機構や支配形態を保存しようとしている場合も少くないだらう。そういう意味で明治十五年前後に於ける官治行政の地方自治への浸透と、いわゆる自由民権運動の「挫折」との意味を考えてみる必要がある。

併しともかくドイツや日本のような型の絶対主義乃至官僚主義については羽仁氏の批判は適切である。それは範疇的に云へば「ケルン陪審法廷に於けるカール・マルクス」の辯論に出て来る「古き封建的官僚社會」「舊社會の政治的表現としての神憲の王權、或は保護的官僚 (Verwundende Bureokratie) (マルクス

共同研究—絶対主義をめぐつて—

・エンゲルス全集、第四卷、六二六頁)等々の言葉の意味するよ  
うな農奴的、半農奴的生産の上にたつ絶対主義である。ところが  
イギリスのように近代産業の勃興に調子を合せて前進している  
ような型の絶対王政についてはそうはゆかない。而もこゝに羽  
仁氏とは全く對蹠的な立場から、イギリスの絶対主義こそ、本  
來の絶対主義であるとして、その進歩的な性格を確認せられる  
林健太郎氏の主張がある。そこでわれわれの共同研究會は次に  
林氏の論文を取上げることとしたわけである。

### 三 林健太郎氏、絶対主義について

林健太郎氏の絶対主義論はカウツキイの「均衡理論」を手が  
かりに進められている。即ち封建的勢力と市民的勢力との何れ  
もがまだ國家權力を奪取するに至らず、兩者の力が均衡してい  
る時に、一見すべての階級を超越したかに見える絶対主義が形  
成せられるといふ理論である。林氏は一應均衡理論を承認しつ  
つ、更にマルクスの理論や歐洲經濟史に關する大塚久雄氏の業  
績を借りて、一そうこの理論を社會經濟史の觀點より掘り下げ  
られたようである。

新舊勢力の均衡の上に絶対主義が成立していると云つただけ  
では、その成立の根據、その社會的基礎が充分明かにされたとは  
云えない。むしろ問題はいくら始まるのであつて、その勢  
力均衡の支點、つまり絶対主義そのものの物質的、社會的基礎

が問はねばならないのである。從來もかういう意味での絶対主義の基礎を明かにしようとした試みはなかつたわけではなく、「封建的土地所有」「農奴的、半農奴的農民に對する收取關係」「半封建的小規模生産者層」等々があげられることがあつた。然るに林氏はこれらが見解に對して「自營農民」こそ絶対主義の物的基礎であるとされる。而もこの「自營農民」はイギリスのいわゆる「ヨーマン」に代表されるようなもので、實質的に封建的土地所有から解放されているあくまで自由な農民である。かういふ點で林氏の見解は、絶対王政を封建的支配であるとする先の羽仁氏の主張と對立している。尤も絶対主義と自營農民との間には、かのフランシス・ベーコンが言つたような直接的意識的關係が何時も成立していたとは限らないであらう。絶対主義が自らの財政的顧慮から直接結びついていたのは商業資本であり、その商業資本は封建的土地所有、農奴的生産の上でも成長し得るものである。又獨立自營農民そのものも農奴制度の完全な解體の後に生れたものではなく、封建社會の諸要素がまだ多分に残存せる環境の中に育つて來たのである。それにも拘らず林氏によれば——と云ふよりもこれは大塚久雄氏の主張だが——この自營農民は農奴制、ギルド制を打破して現れたた中産的商品生産者としてやがてマニファクチュアの經營者ともなり、商業資本を通じて——この商業資本は純粋な仲介商業を營む「ステープラー」ではなく國內に生産的基礎を持つところの「國民

的商人層」である——絶対主義の強力政策と結びつく。こゝで始めて直接には商業資本に依存していたところの絶対主義が、新たな資本主義的生産様式の助産婦たり得たのである。換言すれば、自營農民は商業資本より産業資本への發展の「媒體」である。従つてまた過去と未來へ兩方の手をさしのべている絶対主義は、自營農民を支點とじてはじめてバランスを保ち得るのである。こゝにかの「均衡理論」は林氏によつて社會經濟史的な角度から深く掘り下げられたと言えよう。

共同研究會では出口君が、まづ以上の林氏の絶対主義論に對して、一應その意蘊を認めつゝ兩も本質的に異なる社會史の考へ方から、一つの異説を持ち出された。出口君の説は、たとへずべての者が承認しなくても一定の型と軌道にはまりかけていた共同研究に對して刺戟を與へたといえる。思想のパライテイーと自主性を認めて初めてこの種の共同研究の成果はあがるのであるが、われわれはともすれば安易な抑れあひから同質の思想とイデオロギーの上に研究の「共同性」をデッサン上げようとする危険に陥りがちである。

さて問題は絶対主義の「國民的性格」乃至「民族的性格」に關聯していた。絶対主義の「國民的性格」とは何か。それは林氏の説では次の幾通りかに解せらる。第一に絶対主義の國民的性格はそれが依存し育成しようとする「國民的商人層」より生ずるものである。この商人層が國民的であると云ふ所以は、國

内に、つまり絶対主義の支配圏内に生産的基礎を有する自營農民を築的統轄し、單なる仲介商業資本と異なるからである。而もこの自營農民の國民的性格は、彼がマニユファクチュアを経て産業資本家に發展するという未來とのつながりに於て完成される。従つてこの場合には産業資本がその歴史的段階に於ける國民的性格の完成者であり、本來の民族國家、國民國家の基礎であるということが前提されているように思はれる。それ故に絶対主義の國民的性格は、それが自營農民の上に立ちつゝ、國民的商人層を媒介として産業資本を育成するところに見出されるようである。

第二に、林氏は絶対主義の國民的性格を、國民の大多數が絶対主義を支持するといふ點に見出されるようである。自營農民は封建貴族との對抗上、商人は彼等の上に直接さしつけられる援助の故に、産業資本家は商業資本を通じて與へられる保護のために、絶対主義の支持者となる。従つてこゝでも絶対主義の國民的性格は、近代産業社會の形成に参加する諸階級とのつながりに於てのみ理解されているようである。

第三に、絶対主義はその最盛期に於て——たとへばイギリスのチュードル王朝時代の如き——國民文化の庇護者となつたという點。この場合もその文化が何故に「國民的」であるかの理由は、例へばイギリスに方けるベーコン、シェークスピア、フランスに於けるデカルト、モリエールが絶対主義の牽任者として

て止まり乍らも、彼等の代表する文化があくまで封建主義を敵とし、ブルジョアジの味方に立つていたという點に求めらるるようである。

以上何れの點を見ても、絶対主義の國民的、民族的性格、従つて又絶対主義の本質そのものが、林氏に於ては、近代産業社會の展開過程、社會經濟史の過程との直接的な關係に於て一義的に決定される。これはマルキシズムの經濟史學に慣れている人々には、極めて理解しやすい方法であり、ある場合には殆んど公式化している考え方である。出口君の反對論——出口君自らドイツ風の解釋といはれるが——はこの點に關しては、いま出口君自身の言葉を引用してみよう。

「率直に云へば、絶対主義の本質は中世より近世に至る經濟史的發展の諸相とその競合・推移によつてのみ捉えられず、云ひ換へれば經濟生活その他一般に Kultursysteme と稱せられるものだけから全幅的に捉えうるものではなくて、むしろ Kultur-systeme と質的に異なる社會生活の基礎が歴史的な自己展開を遂げる過程として、そして經濟生活その他の Kultursysteme はそれに關聯を有つものとして、考へるべきものではないだらうか、その基礎は端的に云つて民族である。民族は近代經濟生活が營まれる場であり、封建經濟に固有な場たる村落の封鎖性の崩壞の後に、しばし基礎から遊離彷徨をかきたねた末に——商業資本の民族の内外にわたる跳梁はその徴表である——新しい場

として登場したのである。この場は經濟生活からのみ着き出さるべき社會生活の契機ではなく、他の Kurungsystem と共に經濟生活の統一を可能にする社會の種なのである。自營農民層が絶対主義の社會的基礎であつたということは、それが個人性に目覺めた主體によつてその社會的種に最も近く經濟生活を營んだ者であつたことを物語つてをり、「富の父は大地、母は勞働」と云ふベティの言葉はこの思想的表現である——それが流通過程において過去のなまた未來的な意味をもつ商人層や消費者と聯關しなくてはならなかつたところに、勢力の均衡が問題とされる二様の極がそこから分岐し、その均衡の上に社會的種を統一的に代表する絶対權力が包越的に臨むことを可能ならしめたのである。云はゞその社會的種は新舊二階級の勢力の均衡を本來的に可能ならしめる秤竿であり、その秤竿の支點が自營農民であつたのである。」

山口君によれば、このように考へると、そこから新に三つの展望が開けて来る。第一に絶対主義の民族的性格が明かになること。均衡の場を顧慮しない均衡理論においては、たとえばシエイクスピアとモリエールとの文學の民族的特色が十分に了解されないうだらう。第二に絶対主義の他の民族に對する關係が明かになること。絶対主義の強力政策は階級や身分の差別を離れて社會的種の統一同質化を策するものであり、その時に他の民族に對する本能的な配慮が働いているのである。つまり山口君

によれば絶対主義を單に歴史の後と先とからではなく、民族の内と外とから考へる必要があるのである。第三に絶対主義の民族的類型が明かになること、絶対主義の進歩性とか反動性とかの評定もこの類型化の上で正當に成立つこと。

このような山口君の考へのある部分には共同研究會に持ち出されて熱心な論議の中心になつた。やゝもすれば民族問題を經濟問題に埋沒させがちな吾々にとつて「民族は近代經濟生活が營まれる場」であるとか、「民族は經濟生活の統一を可能にする社會的種」であるとかの言葉はいかになじみ難いものであつても山口君の以上の説をよくかみしめてみるならば、絶対主義の本質は新な角度から浮彫にされることに氣づくであらう。

たゞこゝでは私自身が考へついた二、三の疑問を述べておきたい。第一に山口君は絶対主義の民族的性格を自營農民とのつながりに於て強調してをられる。そこにはベティの句も引用されているように自營農民の民族的性格の重視があると思はれる併し自營農民というこの小生産者はそのまゝでは封建的支配の側へひきもどされる性質のもので、それが民族的性格を與へられるのはいわゆる「國民的商人層」とのつながりに於て、或はやがて産業資本に轉成する未來とのつながりに於てはなからうか。つまり自營農民を支點とする絶対主義は民族性の或は民族國家の完成者であるとは私には思へないのである。絶対主義は「社會的種」を甚だ矛盾にみちた形で反映したかも知れない

が、出口君の云はれるように「社會的種を統一的に代表する」とは云へないのではなからうか。

この疑問は第二の疑問につらなる。つまり絶対主義と他民族との關係の問題である。絶対主義の時代はまだ民族國家の完成期でないとするれば、「民族の内と外」の意識は明確ではなく、従つてまた「他民族に對する本能的な配慮」があつたかどうか疑問である。絶対主義が自己の支配圏——これは必しも地域的な概念ではない——の外に、明瞭な敵對者として感じたものは、完成された他の民族ではなく、その段階ではまだ絶対主義に對する直接の脅威であつた、ローマ法皇スペイン王朝其他の封建的勢力ではなかつたであらうか。絶対主義は民族的意識からではなく、直接には自己の權力地盤の確保と擴大とのために、これらの封建的勢力を打倒し排除しつゝ、而も歴史の論理に於ては民族國家を完成する途にあつたと言えないだらうか。勿論このような私の意見は、絶対主義を「民族の内と外」とから見ようとする出口君の新しい見方に對して、絶対主義を「歴史の後と先」とから見ようとする考へ方を再び持出したに過ぎないではないかと思はれるかも知れない。

出口君の展望の第三、つまり絶対主義の民族的類型が明かにされねばならないという點をしてこの類型を確定した上でその進歩性と反動性とが指摘されねばならないという點については研究會の皆さんの意見は大體一致したようであつた。狩仁五郎

共同研究—絶対主義をめぐつて—

氏の場合には、絶対主義の反動性が一義的に規定され、イギリス型の絶対主義が見落されてゐる點で、民族的類型の無視が指摘された。林氏の場合には、絶対主義の進歩的、反動的側面が同時に明かにされているが、絶対主義をイギリス型に限定している點で類型の無視が問題になるのである。

林氏は、絶対主義の本質を獨立自營農民や「國民的商人層」更にはマニフアクチュアというような資本主義發展のコースに於て究明しようとしている。併しかゝる典型耐なコースを歩んだのはイギリス資本主義のみであるといつてもよい。従つて當然絶対主義もイギリスのみに見られる政治形態ということになるのだが、何故にそういう限定が必要なのだらうか。林氏に於ては、絶対主義の民族的類型の無視が見られるばかりでなく、更にその根底には資本主義發展の民族的類型の無視が見られるのではないか。資本主義發展の型にはイギリス的なものもあれば、ドイツ的なものもあり、日本的なる型もあるとすれば、それ／＼特殊な型の發展を媒介する絶対主義の民族的類型も認められねばならぬ筈である。その點にまた資本主義發展の特殊な類型を基礎とする種々なる型の絶対主義の「進歩性」——それはイギリス型に比して如何に制限的なものではあるにせよ——も認められるのではないか。然るに林氏は絶対主義の進歩性をイギリス型の産業資本發展の方向に於てのみを理解されるので、例へば「プロイセン專制主義」——林氏はこう呼ばれる——はたゞ農奴

制との關聯に於てのみ理解され、その進歩性は全く否定される。そうだとすると林氏の主張は、羽仁氏のそれと正反對の様に見えながら、實は羽仁氏の説を單に裏返へしたものに過ぎないのではなからうか。

林氏の説に對して更に研究會では次の様な批判もなされた。

林氏はイギリス型の絶対主義から絶対主義の本質を抜き出された。併しそれはむしろ絶対主義の特例でなからうかと。順調な資本主義の上昇運動に便乗し、やがては資本主義の成熟そのことによつて打捨てられる、そういうような絶対主義はむしろ例外的な絶対主義ではなからうか。資本主義的經濟地盤の未成熟の故に、官僚、軍隊の權力機構をはりめぐらし、「上から」種々の制度を注入創出し、資本制社會關係の未完成の故に容易に封建的勢力とも妥協し、封建的支配關係をその權力機構の中に取り入れ、更に近代的ブルジョアジーの政治的、意識的無氣力のために、十九世紀の社會にも、廿世紀の社會にも依然として残存する。こういうような絶対主義こそ本來の絶対主義であり、吾々が現代の立場から取上げねばならない絶対主義ではあるまいか。

林氏の論文はなるほどイギリス絶対主義の性格を究明してあますところが無い。併し現代の吾々の問題は、遠く昔に消え去つたイギリスの絶対主義や、チユードア王朝の「進歩的」性格などではない。絶対主義は現代の吾々の生活、意識、感覺に直接ふれるところの生々しい實在である。絶対主義をイギリス的なも

のに限定される林氏の説では、問題の現代的な意義やありかたが無視されている。この點では、私の考えによれば、羽仁氏の主張は色んな缺陷を持つていたといえ、鋭い示唆を含んでいると思ふのである。